



# TWEET

## 番外編！

天野秀昭氏の講演会をぐるんぱの母体、きのくに子どもNPOがまとめたものです

### 天野秀昭氏

日本で最初にプレーパークを作る  
子どもの「遊び」の環境作りのプロフェッショナル

## “あそびは生きる力の源”

### ＜あぶないということについて＞

子どものあそびが危なくないわけがない、子どもはあそびの中でつねに自分の限界に挑戦しているから。子どもというのはなにもできないところから始まるのであって、子どもは親から何か教えられるのではなく、自分の中で、なにかやってみたいという衝動からやってみるんです。そして、歩けるようになる。子どもってやってみたいという衝動で発達していくんです。

しかし、やったことのないことをやるんだから危なくないはずはない。子どもは自分の体力にあったけがをして大きくなります。あぶないことってというのは子どもにとって自分の世界を広げるためには必要なのです。リスク承知です。そうしたことを繰り返し繰り返すことによって自分の限界を知ります。自分の生命を脅かす危険から回避させる能力をつけるんです。

あそびということの、あるいは子どもも三大形容詞は『あぶない』『きたない』『うるさい』です。私は二〇年あまり子どもと関わっていて今の子ども達には以前とくらべて、おとなしくなっていると思います。しかし、今のほうが『あぶない』『きたない』『うるさい』といわれます。これは、子どもの側ではなく、大人の側の問題なのです。社会や大人が子どもを許容できるその範囲が狭くなってきているのです。

どんなに子どもがこの社会から受け入れられないかというのは、幼児を持つお母さんがいちばん良く分かっています。子どもを安心して連れて行ける場所がない。子どもは走るし、騒ぐし、高いところに登りたがるし、あそこのしつけはどうなっているんだろなどといわれるので、お母さんが社会に受け入れてもらうには子どもを大人の価値の中に封じ込めなくてはならないのです。

あそびのなかで起こる、あぶないけが、けがをするかもしれないけど、やってみたい、という衝動が生きる力になると考えます。そうして自分自身の能力を知っていく。しかし、それは大人側から子どもにプログラムできないものです。さあ、今日はここから飛び降りるのが課題、とかいわれても困っちゃいますよね、できる子もいるし、足がすくんじゃう子もいる。限界への挑戦といっても、それぞれに限界というのが違って当然。わかりやすい例として、体力のことを話したけど、

なぜ、どうしてという知的欲求のこともいっしょ、限界への挑戦なのです。テストではその子の欲求とか好奇心とかどこに向いているかなどは表れないのです。今の教育の評価は点数というひとつの切り口がありません。

しかしあそびはルールが変わるんです。一番楽しく遊べる遊び方にルールを決めます。ところがひとつのルールに合わせるのが教育、大人のやり方なのです。相手もできるようにルールをかえる、お互いの持ち味を生かして生活していくという子ども達のほうが余程人にやさしく、社会性が高いと思うのですがどうでしょうか。

子どもには責任はとれないなんていわれませんが、それは賠償責任のことであって、どんな小さな子どもにも人間としての責任は取ることができるとは。ある時、大きい子がナイフを使うのをじっと見ていた2才の女の子が、置かれたナイフを手にとって自分も同じように削ろうとして指を切ったのです。すると、その指をおさえてプレーパークの端まで走って行って、傷口を舐めていました。その子にはやりたくてやったことは自分に責任があることがわかっていたのです。「しまった！」は責任の芽生え。人間としての責任は子どもにも意味がわかるんです。